

# ポーランドの伝説・歴史



ポーランドの伝説・歴史

ポーランドの歴史は、長い間、外国の支配に苦しんで来た。18世紀後半には、ロシア、プロシヤ、オーストリアの3国に分割された。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。

ポーランドの歴史は、長い間、外国の支配に苦しんで来た。18世紀後半には、ロシア、プロシヤ、オーストリアの3国に分割された。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。

ポーランドの歴史は、長い間、外国の支配に苦しんで来た。18世紀後半には、ロシア、プロシヤ、オーストリアの3国に分割された。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。

ポーランドの歴史は、長い間、外国の支配に苦しんで来た。18世紀後半には、ロシア、プロシヤ、オーストリアの3国に分割された。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。

ポーランドの歴史は、長い間、外国の支配に苦しんで来た。18世紀後半には、ロシア、プロシヤ、オーストリアの3国に分割された。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。この分割は、ポーランドの歴史に大きな転機をもたらした。

# ポーランドの都市の伝説

栗原成郎

## ①水の精の予言（ワルシャワの起り）

ワルシャワを中心とするヴィスワ川中流域は中世以来マゾフシエと呼ばれてきました。この地域には新石器時代から集落が点在していた形跡が見られますが、ワルシャワは都市としての発達が遅れ、ヨーロッパの首都のなかでは歴史は比較的浅いほうです。旧市街（スタレ・ミヤスト）は十四世紀に、新市街（フヴェ・ミヤスト）は十五世紀に建設されました。ワルシャワは十世紀から十四世紀末まではポーランド王国の外側に位置していた未開の地で、マゾフシエ侯の支配下にありました。

ワルシャワ Warszawa という地名は「ワルシュの村」Warszew wies を意味し、のちに簡略化されて Warszawa となり、それがマゾフシエ地方の方言で Warszawa と発音されるようになった、と考えられています。Warsz ワルシュは Wacław ワルチスワフという人名の愛称形であり、Warszew は Warsz の所有形容詞です。

地名の語源から見ると、ワルシャ

ワという都市は「ワルシュの村」から発達したことになります。ワルシャワの地名の起りを説明するために民間語源説に基づいて作られたと思われる伝説がいくつか知られています。

昔、ワルシャワの辺りがうっ蒼たる森であった頃のこと、マゾフシエ地方を治めていた若い侯が、ある日、従者たちを伴って狩りに出かけました。目指す獲物は野牛（当時はまだポーランドにたくさん棲息していた）です。狩り好きの侯は狙いをつけていた一頭の巨大な野牛を夢中になって追いかけているうちにいつしか従者たちの一行にはぐれ、ひとり森の奥へとはいりこんで行きました。やがて夜のとぼりが降り、沼地に鬼火が燃え、夜空に北極星が光るころ、ようやく侯は槍で獲物にとどめを刺すことができました。人馬ともに疲れはて、侯は猛烈な喉の渇きを覚え、水を求めて川辺の葦の茂みにはいつ

て行きました。

するとにわかにな水が騒ぎ、ヴィスワ川の中から水の精が現れました。それは半人半魚の美しい顔の娘で、手に弓矢を持っていました。水の精はやにわに金の矢をつがえてひようと放ち、侯に言いました。

「矢の落ちる所に行きなさい。そこにあなただを待っているものがあります。」

侯は矢の飛んだ方向に向かつてヴィスワ川の岸沿いに走りまわりました。灌木の茂みを越えて行くと森があり、その大きな檜の木の下に空き地がありました。昇る太陽の光を浴びて巨大な樹の梢に金の矢が輝いていました。驚いたことに森の中に人が住んでいました。檜の樹の下の空き地には丸太小屋が建っていました。家



ワルシャワのシンボル  
ワルシャワの守護神  
スイレーナ（人魚）彫刻

の前には漁網が広げて干してありました。わらぶき屋根の煙突からは煙が立ちのぼり、魚を焼くにおいがしていました。

空腹を覚えて侯は思わず小屋の敷居をまたぎました。挨拶をして家中を見ると、若い女が双子の赤ん坊に乳をふくませていました。「客きたる家に神宿る」(Gość w dom. Bóg w ogn) という諺のとおり、貧しい漁夫の妻は見知らぬ空腹の客をありあわせのものでもてなしました。自然の中に静かなたたずまいを見せる漁夫の小屋には宮殿にはない活力と安らぎと調和がありました。それこそ侯が長いあいだ求めていたものでした。侯は双子の赤ん坊の名付親を買って出て、男の子を Warsz ワルシュ、女の子を Sawa サワと名付けました。侯

は漁夫の家を祝福して言いました。

「わたしはこの森の地を Warsz と Sawa の手にゆだねよう。二人の働きて将来ここに村ができるだろう。村は発展して他の町にまさる大きな町になるだろう。」

その侯の言葉を聞いてヴィスワ川

## ② 古都の竜とカラス (クラクフ)

わが心のふるさと北海道の「味」忘れがたく、わが家では札幌・白石郵便局扱いの「北海道グルメ会」に入会して毎月ゆうパックで「ふるさと四季の味」を送ってもらっています。今月届いた小包の中身は函館元町のソーセージ・セットでした。ウイナーソーセージ、フランクフルトソーセージと並んでクラカウソーセージがありました。いずれもヨーロッパの都市の名を冠したソーセージです。ウイーン、フランクフルト、クラカウ。このクラカウ Krakau はポーランドの古都 Krakow のドイツ語名です。そこで想いはクラクフへ。

クラクフという地名の由来についてはいろいろな説がありますが、有力な説は次の二つです。

(一) クラク王の町。 Kraków は Krak

の水の精の美しい口もとから笑みがこぼれました。

Warsz と Sawa の一心同体の働きにより Warszawa の町は成った、という伝説です。

(創価大学教授・44号00年1月)

の物主形容詞形であり、「クラクの(町)」という意味です。ある史料によれば、クラクはケルンテン(オーストリア)出身の外來者ですが、ヴィスワ河畔にクラクフの町を建設して自ら「王」を名のり、その地方一帯を治めました。クラクは民の幸福をつねに心にかけていた誠実な名君でした。クラクの家臣たちは王の事績を称えて立派な墳墓を築いたと言われます。

クラク王には大きな悩みがありました。それは城壁のふもとの洞窟に住む恐ろしい竜でした。竜は家畜ばかりでなく、ときには人間をも襲って、むさぼり食いました。そのため人々は一日に三頭の仔牛か羊を生けにえとして竜に献げざるを得ませんでした。王は町を竜の脅威から解放することを決断し、二人の王子に竜

退治を命じました。

王子たちは竜を倒す策を練りました。仔牛の腹の中に硫黄を詰め、腹の皮を縫い合わせたうえで仔牛を竜に投げ与えました。硫黄の詰まった仔牛をまるごと呑み込んだ竜は自ら吐き出した激しい炎につつまれて死にました。

そのさい弟のほうの王子は王位継承上のライバルである兄を襲って殺害し、王宮に戻って、兄は竜との闘いで命を落とした、と嘘の報告をしました。やがて彼は王位につきましたが、すぐに虚偽がばばかれて、兄殺しの罪で永久追放に処せられました。王位はクラクの娘のヴァンダが継いだということです。

(二) カラスの町。ポーランドは国民の約九〇パーセントがカトリック教徒であるキリスト教国ですが、九六六年にミエシユコ王がキリスト教を受容する以前は、自然の諸力を神々と崇める異教徒の国でした。クラクフの町の伝説的な建設者クラクも異教徒でした。彼の名 *Krak* は「カラス」か *krak* は「あかあ鳴く」という意味の動詞 *krakać* クラカチと

関係があり、「カラス」の意味をもつと解釈されています。ふつう「カラス」を表す語は *krak* クルクですが、*krak* は *krak* の別形と考えられます。

異教時代、カラスは農作物の収穫や人間の運命を左右する「聖鳥」と崇められ、人々は豊作と健康と繁栄を祈願して、カラスのために岩穴や森の木陰に穀物やパンを献げ物として置きました。カラス祭祀を司る祭司たちがいて、彼らはカラスの羽色と同様の黒い祭服に身をつつみ、豊饒祈願などの祭儀を行い、いっぽう、森の中に落ちていくカラスの羽根を用いたり、カラスの鳴き声や飛び方から判断して占いを行い、占い師として人々の人生相談に応じました。地域の侯たちも軍事行動や政治的対処の判断に際して異教祭司の助言を頼りとしました。



クラク王

守護神カラスのつばさの陰にあって王朝の繁栄を願う異教時代の支配者たちがカラスに因んだ名を自分につけても、不思議はありません。

キリスト教受容後、教会は偶像崇拜の根絶を図り、異教の神殿や聖所を破壊し、異教祭司を追放しました。しかしキリスト教会はカラスの習性まで変えることはできず、カラスはあいかわらず元の「聖所」に飛んで

### ③カジミエシュ大王と

## ユダヤ人女性エステルカ

ナチス・ドイツによるポーランドのユダヤ人迫害史のなかの一挿話を描いたスピルバーグ監督の映画「シンドラーのリスト」を観てから、その撮影の舞台となったクラクフのカジミエシュ地区は一度は是非訪れたいと思っていた街でした。一九九八年の八月末から九月初めにかけてクラクフにおいて国際スラヴィスト会議が開催されたおり、期せずして、このユダヤ人街にあるホテルに十日も宿泊することになりました。

カジミエシュという地名は、西ヨーロッパで迫害されていたユダヤ人に一三三五年にこの地区への入植を許可したカジミエシュ大王の名に因んで付けられました。十四世紀後半に

きました。業を煮やしたクラクフの司教はカラス狩りを命じました。月のない夜にカラスはかすみ網で一網打尽にされ、羽根と脚を縛られ、首に石を結びつけられてヴィスワ川に沈められました。こうしてカラス崇拜は終わりましたが、その名残は町の名にとどめられています。

(45号00年6月)

はカジミエシュは四方を堅牢な壁で囲まれ、五つの門をもつ、クラクフとは別個のユダヤ人の小都市となりました。ポーランドの三国分割のうち、一八〇〇年にオーストリアがクラクフ市に併合し、街の壁は取り壊されました。第二次世界大戦中ナチス・ドイツはクラクフを占領し、カジミエシュ地区のユダヤ人をヴィスワ川を越えたポトグージェに強制移住させ、さらに各地の収容所へ送りこみました。

現在カジミエシュは「歴史文化地区」として廃墟のなかから再生しつつあります。この再建されつつあるユダヤ人街の広場の一角に「エステル」という

小さなホテルがあります。九八年の春に新築され、オープンしたばかりというだけの理由で、カジミエシュ地区の由来も知らない日本人の旅行社が予約をしてしまった。その三つ星クラスの小ホテルに会議に出席する日本代表団の主力が宿泊することになりました。同宿の日本人は十二名でしたが、紙幅の都合で北海道ポーランド文化協会の会員になっていただいている方だけのお名前を挙げる

と、佐藤純一氏(東大名誉教授)ご夫妻、灰谷慶三氏(北大教授)ご夫妻、小原雅俊氏(東京外国語大教授)、それに栗原夫婦。

私は、ホテルに入る前から、エステルという名前が気になっていました。ユダヤとの関連から旧約聖書の「エステル記」の物語のヒロインの名をとったものであろうことは察しがつきました。エステルはバビロンに捕囚として連れて行かれた離散のユダヤ人の家系に属するが、ペルシャ王クセルクセス(アハシエロス)の王妃となり、ユダヤ人撲滅を企む悪徳の大臣ハマンを権力の座から失脚させて、同胞を危機から救った美貌の女性。

ホテルのフロントの正面の壁には一枚の大きな油絵がかかっています。父親とおぼしき老人が若い美しい

ホテル「エステル」の壁を飾るヤン・マテイコの絵



い娘の肩をそっといだき、いとおいげに顔を寄せて、別れを惜しんでいるように見えます。娘は愁いに満ちた目を伏し目がちにしています。そのまなざしは未来を見つめているようで、左手を父親の愛に応えるかのように老人の胸に当てています。画題はしるされていませんが、ヤン・マテイコ(一八三八〜一九三三)の作です。

私はこの絵にすっかり魅せられていました。最初、娘はエステルで、老人はみなしごの彼女の養父となつたモルデカイであろう、と思っていました。しかし十日絵を見ているうちに、この絵には、聖書主題を踏まえながら、遠い旧約の時代にはなくポーランドの歴史に深く関わって



いる物語が秘められているような気がしてきました。

ホテルの名は *Bier* となっていますが、この形は男性名詞なので女性を表すにはふさわしくなく、ポーランド語では聖書の物語のヒロインの名は *Esra* エステラとなります。その愛称形は *Beka* エステルカです。

ポーランドの伝説によれば、ペルシャ王妃となったエステルと同じような運命をたどったユダヤ人女性があります。庶民を愛し、人種差別を嫌ったカジミエシュ大王に見そめられて宮中に召され、王の寵愛を得て側室となった絶世の美女エステルカがそ

の人です。エステルカは二人の王子と二人の娘を産んだ、と言われます。

いまは詳しく物語を紹介する余裕はありませんが、ポーランドの歴史主題を得意としたマテイコの筆に成るあのホテルの絵は、父の意にさからってカジミエシュ大王の後宮に向かうエステルカの新しい人生への旅立ちを描いたものである、と私には思われます。

エステルカは、聖書のエステルイメージと重なり合って、ポーランドのユダヤ人の守護聖人的存在となつています。

(46号00年10月)

## 琥珀——北方の金

### ザボトニク・ピオトル

私はポーランドの出身ですが、約二年前に札幌の女性と結婚してこちらに来ました。NOKEN インターナショナルでポーランド、ヨーロッパと日本の橋渡し、輸入の仕事をしていきます。

今日は、ポーランドの美しい琥珀にまつわる面白いお話を紹介したいと思います。

ギリシャ神話にも

ポーランド・ドイツ・デンマークの北部の海岸では、現在でも嵐の後には多くの人が集まり、波に打ち寄せられた黄色や暗赤色の小さな石を探す光景が見られます。これが英語でいうアンバー、即ち琥珀です。

ギリシャ神話にも琥珀にまつわる次のような話があります。

「あるとき女神が地上に降りてきて、人間の男性に恋をしました。しかし、これは許されることではありません。

神の国の掟により、女神は追放されて、神としての力を失いました。これからは、限りある命をもった人間として一生地上に生きなければなりません。女神はとても悲しみました。この時流した涙のちに琥珀となりました」

さて、現実に戻りますが、琥珀は樹木から出る脂(やに)が化石化したものです。約五十年前、今の北海やバルチック海は広大な森でした。樹木は大風などによって傷つけられると、内部からやにを出しますが、この時小さな葉や虫がやにの中に入り込むことがあります。この森にもそのような樹木は沢山ありましたが、やがて氷河期が訪れます。北部ヨーロッパがほぼ現在の地形になった頃、植物は全て枯れ果てましたが、やにが化石化して小さな石のようになり、海の底に埋められました。現在もこのような形で残っているのです。

人間はかなり早くから琥珀の美しさに魅せられたようで、三千年前に作られたと思われる首飾りが見つかっています。細工技術は時代と共に向上し装飾品のみならず、戸棚や机といった家具も琥珀で飾られるほどになりました。十四世紀から十八世紀にかけて琥珀芸術は最も開花し、北はスカンジナビアから南はアラビ

ア、西のフランスから東のロシアにいたる各国に広まりました。特に北ドイツ、デンマーク、ポーランドといった琥珀の産地では数多くの芸術品が生まれています。一キログラムの琥珀は金一キログラムに匹敵すると言われました。

### 琥珀の部屋

「琥珀の部屋」という言葉を聞いたことがあるでしょうか。一七〇一年、時のプロイセン王フリードリッヒ三世は、ベルリンにある宮殿に琥珀で飾った部屋を作らせました。王亡きあと、後継者によってロシアのピョートル大帝に贈られ、サンクト・ペテルスブルグの冬の宮殿に運ばれたのです。その後、女帝エリザベットの命により、夏の王宮に移されました。この部屋は壁に琥珀のモザイクがほどこされ、そこに大きな鏡が掛けられていました。陽光に輝く美しき、さらに蝋燭の炎に照らされて放つやわらかな輝きは幻想的で、息をのむほどの美しさだったと伝えられ、世の七不思議の一つにあげられています。しかし、第二次大戦中にドイツ軍の手により解体され、ドイツに移送されたらしく、行方は現在わかっていません。

さて、十九世紀に入ると、バルチッ

ク海沿岸が琥珀の主要産出地となり、今に至っています。細工技術が最も美しいのはグダニスクを中心とする北部ポーランドと言われていますが、琥珀の部屋を作ったマイスターもこの地方の出身だったそうです。長い経験を要する手作業による細工は、今再びその価値を認められ、ネットクレス・ブローチ・指輪など、芸術性の高いアクセサリーとして、琥珀は世界百カ国以上の女性に愛されています。

## やさしいポーランド史

### 伊東孝之

(1)

ポーランドに旅した人なら誰でも気がつくことだが、挨拶するとき男性が女性の手にキスをする。何も知らずにやって来た日本女性が、突然自分の手にキスされてのぼせ上がってしまうということもあるらしい。ヨーロッパにも世界にもいろいろな国があるが、こんな風習がある国は珍しい。

私が考えるに、これは中世騎士道の名残である。日本とヨーロッパの歴史にはあまり共通点がないが、その珍しい共通点の一つに封建制が

ます。

また、美しさもさることながら、幸運を呼ぶ石としても有名で、さらにリュウマチや神経痛を治す効果もあるのです。しかしながら、琥珀についてはまだ不明な点も多く、神秘のベールに包まれているのが現状で、実は女神の涙であったという神話も全くは否定できないかも知れません。

(17号92年1月)

ある。たとえば、お隣の朝鮮や中国にはほんとうの意味での封建制がなかった。ロシアにもなかった。しかし、日本とヨーロッパにはあったのである。

しかし、日本の封建制とヨーロッパの封建制はかなり違う。日本では封建制というと、権威への屈従とか、女性の蔑視とかいうイメージがつきまとう。時代劇によく出てくる武士は殿様の前ではいつくばっている。ヨーロッパの騎士にはあのような姿勢は理解できないだろう。ヨーロッパでは騎士は独立不羈の存在であり、王に仕えるとしても契約に基づいて

仕えるのである。社会的には対等なのである。最近亡くなった名監督、黒沢明の映画に出てくる武士は、この点でどちらかといえばヨーロッパ的といった方がよい。

さて、その騎士は女性崇拜の思想を發達させた。これも日本とは違う点である。もともと、日本でも鎌倉時代までは女性の地位が高かったようであるが、もちろん女性崇拜といっても同じ身分の間だけのことである。身分の壁は封建制においては洋の東西を問わず高かった。

しかし、近代の作法というものは、身分の低いものが身分の高いものの作法を採り入れて成立している。たとえば、日本で「奥さん」という言葉をつつうに使うが、これはもともと大名が相互の連れ合いを指すときに使った言葉であって、農民同士ではけっして使わなかった。ポーランドでも同様であって、たとえば、「パン」(男性のあなた)、「パニ」(女性のあなた、あるいは奥さん)というのは、もともと高位のもの同士で使っていた言葉である。

ポーランドはシラフタという封建貴族が發達したということがよく知られている。シラフタの語源は門閥を意味するドイツ語のゲシュレヒトで、チェコ語を経てポーランド語に

入ったといわれる。主君への軍事的奉仕、騎士法に基づく土地所有、しかしとりわけ血筋がシラフタ身分への帰属を決定した。劍、領地、家柄、この三つはどこでも封建支配の基礎であった。

シラフタにはいろいろ特徴があるが、二つだけ挙げると、まずシラフタの内部で階層分化が生じなかったことである。もちろん貧富の差はあったが、西ヨーロッパや日本におけるように格式の差がなかった。平等意識が強かったのである。もう一つはその数が異常に多かったことである。封建貴族はフランスではせいぜい人口の1%であったといわれるが、ポーランドでは10%にも達した。実はポーランドは近代を迎えたときに、農民とシラフタ以外に有力な社会層、とくに町人が存在しなかった。このため近代以降になっても価値観においてシラフタ、農民が町人化するというよりも、農民、町人がシラフタ化するという現象が見られた。

その一つが、挨拶するたびに女性の手にキスをするという風習である。よい風習が残ったものだと思う。

(早稲田大学教授・

41号98年12月)

ポーランド人の名前はスキ(-skę)で終わっていることが多い。ロシア人もそうではないかという人がいるかも知れない。たしかにスキで終わっている名前をもつロシア人もいるが、そういうロシア人はだいたいポーランド系である。たとえば、ドストエフスキー、シコルスキーがそうである。したがって、スキで終わっている名前はポーランド系と考えてまず間違いない。

スキというのは名詞から形容詞を作るときの語尾である。たとえば、ドンブロヴァという地名があるとすると、ドンブロヴァの、という形容詞を作ろうとすると、ドンブロフスキとなる。つまり、スキで終わる苗字は、「の」という意味なのである。

これはある地方の出身であることを示す。たとえば、ヤン・ドンブロフスキという人がいるとする。これは、ドンブロヴァ出身のヤン、という意味である。実は単に出身だけではなくて、その地方を領有しているという意味も込められている。先の例に従うと、ドンブロヴァという地方を領有しているヤン、ということになる。

領有しているとなると、これはも

うただの農民ではない。そう、領主つまり貴族なのである。ポーランド語でいうシラフタである。

わが国でも昔は出身地十名前という使い方をした。源平の壇ノ浦の戦いに「那須の与一」という弓の名手が登場するが、あれは関東の那須地方の与一という意味だろう。与一はもちろん農民ではなく、那須地方を領有していた豪族の一門と思われる。もともと農民には苗字というのがなかった。苗字は武士にのみ許されていた。そしてその苗字は出身地を示すことが多かったのである。

ポーランド語のスキと同じ役割を果たすのがフランス語ではド(du)、ドイツ語ではフォン(von)である。ただし、ポーランド語と違って名前の前に来る。たとえば、ド・メーストル、フォン・ゼークトという具合である。いずれも貴族の出自を示している。

では、スキで終わる名前の持ち主は全部シラフタだろうか。そうすると、ポーランドはぜひぶ貴族の多い国だ、ちょっと多すぎるのでは、という疑問が湧いてくる。おそらく読者は、ほとんどのポーランド人がスキで終わる名前を名乗っているという印象をもっている。それはちょうどほとんどの韓国朝鮮人がキムという苗字をもっているのと同じで

ある。たしかにポーランドはシラフタが多い国だった。一九世紀初頭に一〇〜一五%ぐらいだったといわれる。しかし、現在の数はとてもそれにとどまるものではないという印象がある。

ただ、社会主義時代の指導者の名前を思い浮かべただけでも、ゴムウカ、ビエルト、オハプ、ギエルクという具合にスキで終わる名前は実は少ない。スキで終わる名前はヤルゼルスキに至ってはじめて登場する。だから、「ほとんどのポーランド人が」という印象は錯覚である。せいぜい三分の一ぐらいというのが正しいだろう。韓国朝鮮人の七五%がキムという姓をもっているのとはちょっと違う。

それにしてももともと一〇〜一五%だったものが現在、三分の一に達しているというのはどういうことか。実は、シラフタ身分は閉鎖的なことで有名だった。封建支配層はどこでも閉鎖的であるが、通常かなり他の社会層から上昇する機会が与えられているものである。たとえばイギリスやフランスでは武勲や仕官によって多くの者が貴族身分に取り立てられている。わが国においては養子縁組などによって町民や百姓が侍に取り立てられる例が多かった。

これに対してポーランドでは一四世紀のカジメシ大王式目以来シラフタ身分がほぼ完全に閉じられ、他の身分からの上昇の機会はきわめて限られていた。正式にシラフタ身分に取り立てられた者は正確に記録されているが、たとえば一六〇一年から一七六三年までの一六三年間に僅かに三六六名だった。

一九世紀末に『ポーランド紋章図鑑』というシラフタの家紋と系譜を網羅した全一三巻の本が編纂されている。由緒正しいシラフタの血を引く者であれば、この本で先祖をたどることができるだろう。つまり、それほどシラフタの範囲は限られていたということである。

しかし、実際にはシラフタの系譜というのは怪しいものである。一八世紀にはシラフタ身分詐称の疑いで裁判所に訴えられる者が跡を絶たなかった。事件はナガナ・シラヘットファ(シラフタ身分告訴)という特別の名称を与えられたほどである。この裁判で証人などを立てて疑いを晴らすことができる、シラフタであるという証文を得ることができた。これを逆用して、シラフタになりすます者もけっこう多かつたらしい。関係者すべてに金を握らせ、事件をでっち上げて勝訴すると、シラフタ



であるというお墨付きが得られたのである。

一九世紀の農民解放以後、農民も苗字を名乗ることが許された。わが国でも農民は明治以後苗字を名乗ることが許されたが、その際に好んで高貴の血筋を示す苗字を採用した。ポーランドでも同様だったらしい。農民あるいはユダヤ人のシラフタ姓採用という過程は、第二次大戦後まで及んだ。

今日ではスキで終わる名前はシラフタの血筋とほとんど関係がないと考えた方がよい。もともと必ずしもすべてのシラフタがスキで終わる名

前を名乗ったわけではない。ラジヴィウ、サペハ、ザレンバ、スカルガなどというポーランド史に名を轟かせた大貴族はスキで終わる名前を名乗っていない。たとえば、暗殺されたケネディ米大統領の夫人ジャックリーヌはラジヴィウ家の出身で、社会主義時代でさえポーランドに帰国すると民衆から王妃様の里帰りのような歓迎を受けた。

本当の貴族は名前を誇る必要がない。名前を誇りにする者がいるとしたら、間違いなしに俗物である。

(43号99年8月)

## 知られざるポーランド

小原 雅 俊

(1)

ベラルーシに源流を持つナレフ川はビャウイストックの近くを流れ下ってワルシャワの北で人造湖、ゼグジェ湖を作る。その後さらに南下してヴィスワ川に流れ込むところに、ワルシャワ郊外の原生林、カンピノス国立公園がある。遠い昔、留学時代に外国人学生のための遠足でだったと思うが、この湿地帯の方々にあ

るナチス・ドイツに抵抗したパルチザン戦の激戦地の跡とモギワと呼ばれる無数の犠牲者たちの墓地を訪ねたことがある。

留学時代に出版した私の最初の翻訳書となった『クリステイナの生と死』(たいまつ社刊。一九九六年に『クリステイナの手紙』と改題。恒文社刊)のあとがきで「ポーランドの砂地の底を流れる地下水には、血の色が混じっていると見えるかもし

れない」と書いたときにも、このカンピノス公園の印象が残っていたことを思い出す。

ゼグジェ湖の水路に停めた友人のヨットの上的のんびりと過ごそうとしていた穏やかな好天の休日の、思いもよらぬ冒険も今では懐かしい思い出だ。突然、巻き上がった突風が私たちのヨットをあつという間に湖のど真ん中に引きさらった。慌てた友人とそのヨット仲間が懸命に岸辺に着けようとするのだが、上手くいったかと思う間もなく再び湖の中央に戻されてしまう。泳げもしなければ救命具も着けていない私と、胴着は着けているが自力ではとても岸辺に泳ぎ着けない女房にも、さながら練達のヨット仲間のように水面ぎりぎりまで体を乗り出させてヨットを操り、どうにか危機を脱出できたときには、我々を誘った二人はどんなにかほっとしたことだろう。

ところでこのゼグジェ湖のところ、かつてはヴィスワ川の支流とされたブク川がウクライナ、ベラルーシ、ポーランドと流れて、ナレフ川に合流する。何度もの民族蜂起のエトスと深く結びついたこの川の名は、ポーランド人にとって特別な感情を呼び覚ます。しかしそれだけではない。もうひとつのポーランド史――

ポーランド・ユダヤ人の歴史とも深く結びついているのである。ワルシャワにたどり着く前に、この川はポーランド最初のユダヤ人絶滅収容所のひとつ、トレ布林カの南を流れ下る。クロード・ランズマン監督の映画「シヨアー」では、もっとも早い絶滅収容所へウムノの四〇万人のユダヤ人のうちで生き残ったたった二人のうちの一、スレブニクがナレフ川(これはヴァルタ川の支流ネル川の間違いなのだが)を少年の日のようにボートで下りながら、ポーランド語の歌を歌うところから始まる。

さてこのナレフ川を上流へ、ビャウイストックに向かつて遡ると、ウオムジャの町の北東約二〇キロに私のこれからの物語の舞台となる人口わずか二千人の町、今やポーランドばかりか、世界中に知られることになったイェドヴァブネ(この地名は「絹の」の意味を持つ)がある。

これまで主としてポーランドの地で行われたユダヤ人の絶滅の責任はもっぱらナチス・ドイツに帰せられてきた。ところが昨年、ニューヨーク大学の教授、ヤン・トマシュ・グロスが著した一冊の本『隣人たち』は、一九四一年七月一〇日、この町の一六〇〇人のユダヤ人住民を納屋に閉じ込め、生きたまま焼き殺した



のはナチス・ドイツではなく「隣人」であるポーランド人住民であったことを明らかにして、全世界に騒然たる論議を巻き起こした。ユダヤ人絶滅に対するポーランド社会の責任が問われることになったのである。いったい何が起こったというのか。

次回から、九世紀余りにわたってポーランドとポーランド・ユダヤ人が築き上げてきた歴史を振り返りながら、イエドヴァブネの出来事が持つ意味を考えてみたい。

(東京外国語大学・48号01年6月)

(2)

ハシバミの実を食べたことがあるだろうか。木漏れ日がまぶしいコンもりと茂った大きな葉の間から釣鐘のような実をもちで、まわりを包むビロードのような外側の皮を剥き、こりこりした青い果実を初めて口にしたのは、ワルシャワ大学の学友の家族が住むポーランド最北端の、冬には零下三十度を越えることがある人口六万人弱の町スヴァウキを訪ねたときだった。北に向かうとすぐロシアの飛び地に遮られ、東に向かうとリトアニアとの国境にぶつかるが、無数の湖や沼地とそれを取り囲む深い森はさらに東へと伸びている。

アンジェイ・ヴァイダの映画「愛の記録」の物語もそんな深い森に囲まれたニエメン川(リトアニア語でネムナス、ベラルーシ語でネマン)の右岸支流ヴィリア川沿いのポーランドの町ヴィルノ、今日のリトアニアの首都ヴィルニウスが舞台だ。その北西にはニエメン川に面して杉原千畝氏がユダヤ人を救出したカウナス(ポーランド語名コヴノ)がある。スヴァウキもまたニエメン川の左岸支流チャルナ・ハンチャ川に面している。この川はまもなくして最深部が七十三メートルに達するヴィゲルイ湖に流れ込む。そこが複雑な地形、豊かな動植物相を誇り、無数の湖沼と水路で結ばれたカヤック愛好者の天国、ヴィゲルイ国立公園だが、この一帯もまた鬱蒼とした森に囲まれ、そこに川や大きな湖があることが分からないほどだ。

私にとってポーランドのユダヤ人世界のイメージはこうした豊かな水を湛えた川とその周りに広がる深い森の中を開けた小都市と結びついている。もちろん大都市にも多くのユダヤ人が住んでいた。例えばヴィルニウスの一八九七年の民族構成をみるとユダヤ人が四〇・三%を占めていた(他にポーランド人三〇・九%、ロシア人二〇・二%、ベラルーシ人

四・二%、リトアニア人はわずか二・〇%、その他二・四%)し、カウナスでは一九三三年には全住民の三分の一がユダヤ人であった。しかし、かつて栄華を誇り、黒海にまで版図を広げた第一共和国時代のポーランド領ではユダヤ人は大都市だけでなく、シユラフタとともに地方へと移動し、いたるところに極めてポーランド的な現象とされるシュテットル(彼らが話していた言語のイディッシュ語で「小さな町」の意味)を築き、そこで敬虔な宗教共同体を営んだ。西欧ではユダヤ人の住みついた国とその文化への同化が進んだが、ポーランド、とりわけかつてのロシア分割占領下では、第二次世界大戦にいたるまでこのようなユダヤ人共同体がいたるところに残っていた。スヴァウキにも大きなユダヤ人集住地があった。イエドヴァブネにだけだけのユダヤ人が住んでいたか確定するのは難しいが、ポーランド人住民による虐殺が起こったときの町の人口と犠牲者数一六〇〇人(この数を確定するために死体発掘までしたが、ユダヤ教の宗教上の制約から全面的には行えなかったようだ)を比較すると、かなりのパーセンテージになると思われる。そこを東に向かうと、無数の民族、言語、宗教、習俗が隣り合っ

て暮らしていたがゆえにエスペラント語を構想したとされるザメンホフの生地、ポーランド北東部最大の都市ビャウイストクがある。両大戦間期にはウオムジャ、スヴァウキ、グロドノをもその一部としていたこのビャウイストク地方では一九一九年には住民の一七・四%がユダヤ人であり、時にユダヤ人が住民の半分以上を占めて、「ヨーロッパ・ユダヤ人の心臓」とも呼ばれた地域だった。ビャウイストクの町自体も一九一三年のピーク時には人口の七〇パーセントがユダヤ人であった。一九三九年には、この町に敬虔なユダヤ教徒の祈りの場であり、学問や会合の場でもあったシナゴークや祈りの家が一〇〇近くあった。

イエドヴァブネの「犯罪」がどのようなものであったか、なぜ起こったのか、今のポーランド人がそれをどう受け止めようとしているかを理解するには、今では記憶の中のみ生きる、かつてヨーロッパの他の部分から追放されてポーランドに避難所を見出し、ヨーロッパ最大のユダヤ人集住地となり、貧しさに喘ぎながらも他のどの国にも見られなかった豊かな文化を生み出しながら、ポーランド人と運命をともにしてきたポーランド・ユダヤ人の歴史を抜き

にしては不可能であろう。

(49号01年10月)

(3)

ポーランドへの旅はおのずと闇に没した過去への遡行の旅とならざるをえない。

多分まだ六〇年代末だったと思うが、ポーランドの友人や数人の当時の日本人留学生仲間とともにポーランドの南東部、ベスキト山脈の一部をなすビエシチャディ山地(ポーランド領に属す西ビエシチャディ山地)を夏の休暇を利用して歩き回ったことがある。ウクライナの領土に潜り込んだような、東部国境で唯一自然国境をなしているこの一帯は、サン川が作る湿地帯にポーランドでは珍しく鬱蒼と下草が生い茂り、その緑の横溢に日本にいるかのような懐かしさを感じたものだった。そこから西へ向かったのだっただろうか。西の南端にはスロヴァキアとの国境をなす千メートル級の山々が聳えているが、その山あいのなだらかな坂道を、周囲を放置された果樹園に囲まれて点在する、かつて裕福な生業を紡いでいたことを推測させる家屋跡を左右に見て、一体いつになつたら人家にたどり着けるかと不安に駆られな

がら黙々と歩き続けたのを覚えてい

る。地図には名前が載っているのだが、住民ゼロの村々が戦後長らく、いたるところにあつた地域である。当時すでに政府が補助金や長期の税の免除といった優遇策によつて入植を奨励していたが、目に見える成果がまだ現われていない、という話だった。今でも狼が出没するらしい奥深い森が連なるこの一帯では入植が始まったばかりの頃は外出するとき、神父さんでさえ銃を手放せなかつたそう。

ら一九五六年まで続き、この間にこの地域の住民のほとんどが村落ごと姿を消したのだ。また、政府と軍は一九四七年、ウクライナ蜂起軍を壊滅させた後、ポーランド南東部(ジエシユフ県、ルブリン県、クラクフ県)のウクライナ人及びレムキ人の住民十四万人余りをポーランド北部や西部の県に強制移住させた。今日、「歴史の見直し」の対象となつている戦後史の「闇」のひとつ、いわゆる「ヴィスワ作戦」である。

ポーランド語の語彙をスロヴァキア語の文法で話しているような不思議なポーランド語で、納屋の屋根裏にある干草置き場に宿を提供し、薄暗い土間の木桶からすくつてご馳走してくれたシシャドウエ・ムレコ(凝乳)——この辺りの結構強い夏の陽射しの中を歩き続けて乾いた喉には最高の美味だった。私がシシャドウエ・ムレコを飲めるようになったのはこのときのことだ——とUFOの形をした、大きな、裏に麦藁が混じった素朴な自家製パンの味は今でも忘れられない。

本題に入ろう。このビエシチャディ山地の気ままなハイキングはマゾフシエ地方の寂しい風景とは別の豊穡な自然とそこに刻まれた痕跡からかろうじて読み取れる、つい十数年前

1988年のハシド(敬けんなユダヤ教徒)の人々の風景



までこの地で練り広げられていた苛酷な歴史と対面する機会であつたが、当時はいまひとつ理解出来なかつた風景もある。この辺りのなだらかな山腹では牛の放牧が行われていたが、そんな放牧地の中に牛の糞にまみれて墓石らしきものが散在する光景である。ヘブライ文字が書き付けられた墓石はかつてこの地にもユダヤ人共同体があり、その住人たちがそこで練り広げられていた暮らしともども消え失せたことの証なのだ。今こそ、この牛の糞にまみれた墓石が

語りかけるものが少しは分かるが、当時、それはどこか奇妙な印象を残したに過ぎなかった。

イェドヴァブネの出来事はポーランドを占領していたソ連軍がナチス・ドイツ軍の侵攻の前に、ポーランド領から撤退する時に起きた。地元では今も事実を認めることを拒み続ける人が多数を占めているようだが、この事件が歴史の時間軸と空間軸が交わったところで生じた、おそらく数少ない出来事のひとつであることは間違いないだろう。しかし、時間の軸を廻り、空間の軸を辿ってみれば、イェドヴァブネの出来事はポーランドのどこで起こっても不思議でないことが問題なのだ。一九世紀半ばに膨大な数の作品を残し、今も読み継がれている作家ユゼフ・イグナツィ・クラシエフスキがあるとこ

## 総選挙で「連帯」市民委員会圧勝

伊 東 孝 之

六月四日と十八日に行なわれた選挙で、「連帯」市民委員会の推薦を受けた候補者が地滑り的大勝利を収めました。下院では無党派に割り当てられた百六十一議席（三五％）の全

ろで書いたように「どの町をもポーランドの町にしているものが何かお分かりだろうか。ユダヤ人だ。ユダヤ人が欠けることになる」と、我々は全くの異国に乗り入れることになり、彼らがいること、その貢献に慣れた我々には何かが足りないような気がする」のであり、ウクライナのヴィテプスクに生まれ育ったシャガールの絵の中に甦った理想化されたシュテットルへの郷愁と「ユダヤ人のいない」現実との間の歴史の残酷さを尚いつそう思うのである。ひよつとすると、一九八八年、最初のインティファダが始まる直前に撮ったハシドの人々がエルサレムに再現した東ヨーロッパの「ゲット」の風景がまだワルシャワの一角で見られたかも知れないのである。（元）

（50号02年6月）

議席を市民委員会推薦の候補者が独占し、今回新しく設けられ、完全な自由選挙が行なわれた上院では百議席中九十九議席までを市民委員会の候補者が獲得しました。これに対し

て政府側は全国リスト（指定席）で立候補した国家の最重要指導者三十五人のうち三十三人までが五十％の得票というハードルを越えることができず、落選しました。

選挙結果をソ連のゴルバチョフ指導部は平静に、むしろ好意的に受けとめています。アメリカ、フランス、イギリスはほとんど熱狂的といってよい歓迎ぶりを示し、アメリカは十億ドルの、またフランスは一億ドルの援助を約束しました。西独はやや醒めた見方をしているようです。心穏やかでないのは東欧諸国の共産党政権でしょうが、公式の反応はまだ伝えられていません。

選挙結果は国内のどの勢力にとってもまったく予想外のものでした。事前に国内の中立的な観察者が五つのシナリオを描きましたが、そのうちのひとつも極端なものをさらに極端にした結果となりました。観察者はこれは最悪のシナリオで、政治的不安定と経済的破局を招くこと必定と警告しております。ポーランドの共産党政権は国民の支持がないことが明らかになった後も政権を維持しなければならぬという困った立場に追い込まれるでしょう。「連帯」にとつても状況は必ずしも歓迎すべきものではありません。勝利が伝えら

れても「連帯」派の新聞に歓喜の声は少なく、むしろ当惑の色がうかがわれます。ワレサがいうとおり、「連帯」には国民の支持があつても政権を担当する能力がありません。政権に参加しても野党にとどまっても政府の不人気な政策を支持せざるを得ず、国民の期待を裏切る結果となる恐れがあります。

今度の選挙結果を数字通りに受け取ることは危険です。比例代表制であれば、政府側も上院に四分の一ぐらゐの議席を確保できたでしょう。今回リストから立候補した重要指導者は、落選したとはいえ四八％もの票を集めています。他方で「連帯」は同質的な政党ではなく、さまざまに政治勢力の寄せ集めです。ある国内の解説者は、これは「統一野党勢力」だと性格づけています。たまたま現体側への抗議ということで一緒になり、多くの票を獲得しましたが、具体的な問題をめぐって分解する恐れがあります。

今後、ポーランドの政治情勢は大いに流動化することでしょうが、大枠をなすのは選挙の結果というよりも、先の円卓会議での申し合わせだと思われまふ。

（北大スラブ研究センター教授・

7号89年7月）



# 21世紀の亡命者たち

佐光伸一

我が胸から  
ほとぼしる魂よ、  
もし祖国に赴き  
たとえひかりとなつても、  
わたしのもとへと  
帰ってくるなら、  
祖国へのわたしの思慕を、  
どうかそこに  
置き忘れないでくれ、  
彼の地でそれは  
金色の大使のごとく佇み  
時折、驚のごとく  
街の上空をさまよい  
ふたたび峡谷へと  
舞い降りると、  
翼を休め、光に輝く。  
おまえを清める軽やかな大気を、  
わたしは  
我が祖国へと吹き込んだのだ。  
(いつの日かわが祖国へと…)

期に亡命者サークルの愛国的「ポーランド救世主」思想には幻滅していた彼だが、祖国への思いは終生変わる事がなかった。  
芸術家、学者、政治エリートなど国の知性・才能の大部分が国外へと脱出した「大亡命」は、二〇世紀になつても一九五六年、六八年、七〇年代のギエルク時代、八〇年の連帯時代と、政治亡命という伝統をポーランドに育むきつかけとなり続けた。  
亡命者たちに祖国を捨てることを強要してきた政治的枠組みが崩壊し、硬直した西側よりもポーランドのほうがビジネスチャンスが豊かに見える現在、その伝統も途絶えたかと思えた。しかし二一世紀にはいつて、にわかに国外に脱出する若者の数が急増しはじめているという。

職探しに国外へ…

二〇〇二年三月一〇日号の「フ・プロスト」誌の伝えるところによると、ここ二二年間で国外に出た若者の

数は二五万人に昇る。この数は現在のポーランドにおいて高校の一学年

がまるまるいなくなるのに相当する。これは一九八〇年の連帯時代の亡命に次ぐ規模のものであるという。その連帯時代に国を捨てたひとたちが同じ時期に二〇万人もポーランドへ戻ってきているという事実と対照的である。  
現在のこの「亡命」の特徴は、その大部分が二〇〜二八歳までの世代に占められていることである。Price water house coopers によるレポートによると一五〜二九歳までのポーランド人の六八・八%が西側で仕事を手に入りたいと思っており、七七%が西側でのほうが容易に仕事が入ると考えている。「フ・プロスト」誌の記事ではその理由を、経済成長率が七%を越えた一九九七年に国外に出た者はわずか三万人しかいなかったが、経済成長率が当時の七分の一の現在、国外逃亡者の数も七倍になったのだという推測を述べている。

これまでの「亡命」にもさまざまなる理由が考えられるが、必ずそこには政治的要因が存在した。それでは職探しに国外に出る若者達の経済活動を果たして「亡命」として定義できるのだろうか。

三月一日付の「フ・プロスト」誌にさらに面白い記事があった。連帯世代の一物理学者によって書かれた

この記事は「内的亡命者たち」と題されている。そこで彼は、社会主義時代の鉄のカーテンに代わり、今度若い世代と古い世代を隔てる新しい「鉄のカーテン」が現れたと警告している。ポーランドの政治システムではいまだに、権力の中へと入った若者が、つぎつぎとそのシステムに飲み込まれ順応していく。以前と同様、医者は週七二時間労働を強いられ、学者や警官はほとんど失業手当でなみの給料しか手にできない、そんな「新生ポーランド」に裏切られた若者は、社会に直接的に関わりうとすることを拒絶するか、国外へと逃亡する。これをこの記事の著者は若者たちの自衛行為と呼んでいる。その原因を国の学問に対する軽視としている。なぜなら学術研究に対する国の予算は毎年二四%ずつ削減され、研究活動に携わる者の多くが国外へと流れているという。そのことが国全体の活力を奪っているというのである。学者らしい我田引水的な結論と見えなくもない。

変化に対応できず

しかし現在の失業問題の特徴を考えると、それもあながち的外れではないだろう。というのも現在のポーランドの就職市場ではつぎのような

現象が起こっている。つまり社会の新しい変化に応じて生み出された新しい職場は、それに見合った新しい知識や能力が要求される。しかし失業者の中にはその条件を満たすものがない。つまり需要と供給がボタンの掛け違いのような状態になっているのである。労働局の試算によると昨年、志願者が見つからなかったポストが二〇万件にも上るといふ。その一方で二年以上も職の見つからない人の数は昨年は七〇万人以上にも達していた。

つまりこの知識人の空洞化は「亡命」と呼ぶに足るほど十分政治的である。ポーランドではこれを「手もなく足による投票行為」と呼んでいる。ヤギエウオ大学の国文科を卒業した筆者の友人も、国語教師の安月給にうんざりしアメリカへ渡り、ホテルでポーターをしている。ポーランドからの留学生達も滞在期間を延長し続けている。

先に紹介した「フ・プロスト」誌は結論として、「現在のポーランドが、国を変える運命にある若者達がそこに住むことを望まないような国である」というシグナルを、亡命者達は西側の投資家に発しているのだ」という否定的な見解を示している。

### 亡命と帰国の伝統

はたしてそうだろうか。優秀な若者達が国外で活躍することこそ、国の威信を高めることになりはしないだろうか。冒頭で述べた「大亡命」の時代、才能あふれるポーランド人が湧き出るように西側に到着した。彼らを見て、このような人材をつぎつぎと送り込むポーランドが、分割後も決して滅びていないことを西側の人間は確信したという。芸術分野は言うに及ばず、オーストラリアを探検したパヴェウ・シュチュシエレツキ、カナダの建築家カシミール・グゾフスキ、ペルーに鉄道を引いたアーネスト・マリノフスキなど歴史に名をとどめているポーランド人亡命者は枚挙にいとまがない。二〇世紀最大のフランス詩人ギヨーム・アポリネールもポーランド人亡命者の血を引くひとりである。イギリスのポーランド史家ノーマン・デイヴィスは著書の中でポーランド人による亡命の特徴として、亡命後も祖国と絶えずコンタクトを持つこと、そして最後には結局帰国することを挙げている。もし現在国を捨てようとしている若者がいつの日か本当に祖国に帰ってくるとしたなら、「大亡命」の精神は、二一世紀のポーランドにおいてもまだ消え去ってはいないと

言えるのではないだろうか。  
(北海道大学文学研究科博士課程・50号02年6月)

### ポーランド料理 (1)

#### Salatka jarzynowa 野菜サラダ

《材料》(4人分)

じゃがいも	4個	〈調味料〉	
人参	2本	塩、こしょう	少々
セロリ	1本	マヨネーズ	大さじ3~4
りんご	大1個		
固ゆで玉子	2個		
冷凍グリーンピース	200g		
キュウリのピクルス	4本		
サラダ菜、ミニトマト	適宜		

《作り方》

- ①じゃがいも、人参をよく洗い、皮つきのまま塩水で茹でる。
- ②グリーンピースに熱湯をかけて解凍する。
- ③セロリ、皮をむいたりんご、ピクルスを竇の目に切る。
- ④ゆで玉子をおろし金でおろし、細かくする。
- ⑤茹でたじゃがいも、人参の皮をむき、竇の目に切る。
- ⑥全ての材料を大きなボールに入れ、マヨネーズ、塩、こしょうで和える。

《盛り付け》

洗ったサラダ菜に⑥をのせてミニトマトを飾る。

ポーランド料理 (2)

**Zrazy wieprzowe** 豚肉のキノコソース煮

《材料》(4人分)

豚肉肩ロース	厚切り 4枚	〈調味料〉	
玉ねぎ	1/2個	塩、こしょう	少々
きのこ(シイタケ、しめじ、えのき茸、マッシュルーム)	各1パック	ローリエの葉	1枚
サラダ油	大さじ1	コンソメの素	1個
バター	大さじ1	〈付け合わせとして〉	
小麦粉	少々	マカロニ	
水	400cc	じゃがいもピューレー又は御飯	
		茹でたブロッコリー	

《作り方》

- ①玉ねぎ、シイタケ、マッシュルームをスライスする。
- ②しめじ、えのき茸をきれいにし、ほぐす。
- ③大きな浅鍋にバター大さじ1杯を熱して①と②の野菜を炒める。
- ④③にローリエの葉、コンソメスープの素、ひたひたの水を入れて中火で煮る。
- ⑤肉を洗い、水気をきる。筋を切り、軽く叩いて両面に塩こしょうをし、小麦粉をつける。
- ⑥大きなフライパンにサラダ油を入れ、かなり熱くなるまで熱し、⑤の肉を両面きつね色になるまで焼く。
- ⑦④の鍋に肉を入れて蓋をし、肉が柔らかくなるまで、弱火で20分位煮込む。
- ⑧付け合わせとして、マカロニとブロッコリーを塩茹でする。
- ⑨温かいうちに皿に盛り付ける。

ポーランド料理 (3)

**Bigos** ビゴス

《材料》(6人分)

ザワークラウト(缶詰)	500g	トマトペースト	50g
キャベツ	500g	小麦粉	20g
豚肉	250g	干しシイタケ	1枚
牛肉	100g	干しプラム	6個
ソーセージ	200g	赤ワイン	100cc
ベーコン	200g	ローレルの葉	1枚
玉ねぎ	1個	塩、こしょう	少々
サラダ油		コンソメスープの素	

《作り方》

- ①厚手の鍋に干しシイタケ、コンソメスープの素、干しプラム、牛肉(薄切り一口大)、ザワークラウトを入れ、材料がかくれる程度に水を加える。
  - ②中火で20分ほど煮てから、キャベツを細切りにしたものを加える。キャベツがやわらかくなるまで煮込む。
  - ③別のフライパンでサラダ油を熱し、玉ねぎのみじん切り、豚肉(薄切り一口大)、ソーセージ、ベーコンを炒めてから、少し「蒸し煮」のようにする。肉に火が通ったら小麦粉を加えて、小麦粉がきつね色になるまで炒め合わせる。
  - ④このフライパンに、②のキャベツを入れ、さらにトマトペースト、赤ワインを加えて、塩、こしょうで味をととのえ、混ぜながら10分間ほど煮込む。
- このようにして出来たビゴスにライブレッドを添えて食卓に出す。